

故郷と私

ウィンウィン

農家に生まれた私は、子どものときから田んぼやクレークに馴染んでいた。雨季には水牛たちを使って広い緑野を耕すのが楽しくて仕方なかった。夏季は黄金に実った稲の香りを嗅ぐのが、この上なくありがたく嬉しかったものだ。

学生時代は、まじめに努めたおかげで、心理学の学位を取ることができた。ラングーン（ヤンゴン）大学卒業後は、地元のテビンゼイ村の中学校で12年間、教職に就いた。

1999年、私はローカル NGO の FRED A（森林資源開発保全協会）と縁を持ち、社会林業事例視察団の一員として、ラプタへ派遣された。そこでは、収量が落ち放棄された水田跡地にマングローブ樹種が植えられていた。そして私は、故郷の放棄水田も、マングローブを植林することで、再び生産的な土地に生まれ変わることを願ったのである。

それからというもの、私は FRED A の植林活動普及員となり、社会林業事業に参画するようになる。村々と協力して、塩生植物やアカンサスがはびこる荒地にアビセニアやソネラティア、リゾフォーラを植えてきた。村のコミュニティと積極的に関わり、資金や種子を提供し、植林技術などを指導して回った。

10年経った頃、植えたマングローブが生長し、一部は間伐材が薪木や建材に利用され、コミュニティの需要に応じているのを見ると、嬉しくて信じられない気持ちになる。

もし、このようなマングローブ植林が成功し、現存の天然林を効果的に守ることができたら、50年、100年前の緑豊かなマングローブ林を取り戻すことが可能に違いない。

この10年の取り組みは、決して楽なものではなかった。資源利用の適切な管理と制御があつて初めて、私たちの活動は持続可能となる。万一、管理に失敗したら、今までの努力は簡単に水泡に帰してしまうだろう。私はいつもそれを危惧した。

単にマングローブを植えるだけでは十分ではない。木々を深く愛し、効果的に守る。そうすることで、森はいつまでも存続するのだ。

2000年以降、私たちは12の小中学校で若い世代に向け環境教育プログラムを実施し、環境保護の機運醸成に努めてきた。私は今、学校の先生や生徒・親たちと一緒に、ゴミのクリーンアップ活動、地球温暖化・気候変動・マングローブ生態系の講義、そして苗床造成・学校植林などに率先して取り組んでいる。ピンダイエで学校コンサートを催したり、スタディツアーを行ったり、ポスターやカレンダーなど啓蒙用の教材を作ったりするのはその一環である。

一つ一つの取り組みは決して大きくはない。しかし、十分な気づきと正しいガイダンスの下、それらを繋げていけば、全く立派なものになる。そして、それは確実にこの地球を健康で安定した永く続く星にする手助けとなると信じている。

さあ、みんなも一緒に行動を起こそう！

（FRED A スタッフ、ミャンマー・カニンゴン村在住）